

日韓戦争児童文学の比較研究

— 韓国初等教育への導入の提案 —

木村 功 ・ キム ジョンオー*

現在韓国の小学校国語教科書には、朝鮮戦争を内容とする戦争児童文学が採録されていない。過去の戦争から学べる惨状などを国語科の文学教育で教えることには意義がある。韓国の朝鮮戦争とは異なる、日本の戦争を描いた戦争児童文学を分析し、韓国の指導要領に基づいて日韓の戦争児童文学が韓国の小学校国語教育現場で扱われるようにしたい。これに関しての日本の戦争児童文学の導入の意義と、学年による作品配置案を考察した。

Keywords：戦争児童文学，文学教育，平和教育，韓国への導入

1. はじめに

(1) 韓国小学校国語教科書の問題

現在、韓国は北朝鮮との関係改善を進めている。90年代の韓国の小学校の国語教科書には、朝鮮戦争を内容とする童話や小説が多く載せてあった。これは韓国として北朝鮮が敵国であることと、平和教育を目指していたからである。しかし、やがて両国関係の改善を図っていくうちに、韓国の小学校の国語教科書では戦争の童話が無くなって行った。戦争児童文学が採録されなくなった理由について韓国の教員はだれも知らないが、韓国と北朝鮮との関係改善に関わっていると推測される。現在、韓国の小学校教科書には朝鮮戦争を内容とする戦争児童文学が一編も採録されていない。そして教員たちはなぜ戦争児童文学が一編もないのか疑問を感じている。最近まで、6学年の国語教科書で載っていた米軍の軍艦で避難する内容の童話「온양이」(オンヤンイ)も採録から外れてしまった。他教科をみると、社会科の歴史や道徳科の平和教育で朝鮮戦争のことを述べているが文学の形ではない。これに関して韓国の国家報勲処からこの戦争文学が抜けたことが指摘された。1997年5月に国家報勲処が行った教科書調査によると中・高等学校の教科書では朝鮮戦争の内

容が歴史教科書で2～3頁しか載っていないし、小学校の教科書ではどこにも見つからなかった。この調査を行った国家報勲処の課長が投稿した「東亜日報」の私説では日本の国語教科書に載っている「一つの花」を取り上げ、比較しながら韓国の教科書を批判していた¹⁾。

(2) 朝鮮戦争とイデオロギー対立による韓国の教育実態

韓国は日本統治時代および朝鮮戦争を経てきた。1945年8月15日をもって日本帝国の統治が終わり、朝鮮半島に平和が訪れることを朝鮮半島の人々は期待していた。しかし韓国には米国が、北朝鮮にはソ連が信託統治し、約3年間の不安定な政治情勢が続いた。1948年には韓国と北朝鮮がそれぞれの政府を成立させるに至る。それから理念対立が激しくなり朝鮮戦争が朝鮮半島で勃発した。

1953年7月の休戦後、反共産主義教育による戦争児童文学が何編か韓国の小学校国語教科書に採録されたが、1-(1)で述べたように現在の教科書には一編も採録されていない。韓国の小学校国語教科書は国定なので、国語教科書は韓国の教育部が直接発行する。つまり、周りの国との関係によって教育政

岡山大学学術研究院教育学域 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*文部科学省教員研修生

A Comparative Study on the Japanese and Korean Children's War Literature and its Introduction to Korean Elementary Education

Takumi KIMURA and KIM JONG OH*

Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Japanese Government Teacher Training Student

策が変わっていき、教科書の内容も変わっていく。90年代までの韓国の教育現場では、北朝鮮から来た共産ゲリラが韓国人を殺したり怪我をさせたりする話が童話となって反共教育の教材として扱われた。その教育を受けた小学生たちは反共意識を高め、山や野原に行って北朝鮮から飛んできた宣伝ビラを拾って学校で学用品などと交換したのである。北朝鮮や戦争と関連があった作者未詳の童話は平和教育の一環で扱われたのではなく、反共教育や離散家族問題を教育するために扱われた。離散家族問題も離散の痛みを教えるだけだった。最近になって南北の平和的雰囲気から停戦状態が続き、過去にあった朝鮮戦争を教えるより南北統一を図る教育が行われている。このように過去の朝鮮戦争から学べる平和の教訓や反戦思想は、今も昔も教育現場には見いだせない。

しかし、実際に教科書には載っていないが、南北戦争の童話や小説は多数ある。ただ、教科書に採録されていない理由は、上に述べたように現在の政治状況や北朝鮮外交と関連があると推測する。道徳教科書では護国(防衛)の観点から朝鮮戦争の話を語っているが、この話は文学的な想像ができる童話や小説ではない。そこでは戦争の英雄や戦争で活躍した人の偉人伝が大部分を占めている。そしてこの題材が示すのは護国の価値観や愛国心である。人を殺す戦争を扱う内容であるため、併せて平和教育も行われるが、そもそも題材のテーマが護国や愛国心であるので、平和教育も断片的な内容にとどまっている。

(3) 戦争児童文学を韓国の教育現場へ導入する意義

本論で論じるように、児童を対象に戦争児童文学を通して平和教育が行われることには大きな意義がある。読者である児童が主体的に戦争の話を読んで自分の価値観を見直し、想像力を用いて戦争がもたらした惨状を理解することができる。韓国では日本のように戦争児童文学が多くない。児童には様々な経験をさせることが必要なので、平和教育を通じて反戦意識を育むためにも、韓国の教育には日本など他国の戦争児童文学を学ぶ機会が必要である。戦争では国籍と関係なく、誰もが命や家族や財産を失う被害者になる点で、他国の戦争児童文学を韓国の児童に読ませるのは平和教育の観点から教育的価値がある。そして単なる平和教育ではなく、言語表現に基づき想像力を用いて登場人物に同化することは疑似体験に繋がる。これが文学教育の特徴であり、文学教育を基本として平和教育を行う理由でもある。後で論じるように日本の小学校学習指導要領の国語科の「C. 読むこと」にある「考えの形成」と韓国

の国語科指導要領の文学領域にある「作品で見出した価値を内面化する」を指導の根拠として、国語科の文学教育を中心に児童の反戦意識を育み、平和教育へ繋がるようにする。

特に日本の戦争には韓国と違い、原爆による甚大な被害があった。韓国にはなかった戦争の形を児童に間接的に体験させることで戦争や原爆の非人道性を理解させるため、日本の戦争児童文学を読ませる必要がある。例えば朝鮮戦争では、日本と違って韓国側には空襲が少なかった。ほぼ米軍が北朝鮮の人民軍の陣営へ戦闘機で爆弾を落としたため、韓国の戦争児童文学では空襲のことは殆ど取り上げられないのである。一方、日本の戦争児童文学では各地の空襲や沖縄戦、広島・長崎の原爆が描写されている。ここから現在日本の教科書に採録されている空襲ものの「ちいちゃんのかげおくり」や、原爆ものの「ヒロシマの歌」などが生まれた。教科書以外にも沖縄での戦争などの戦争児童文学が多数確認できる。したがって日本の戦争児童文学を韓国の教育現場へ導入する目的は、未来に殺し合いのない平和の時代がくるように、韓国の戦争児童文学とともに様々な日本の戦争児童文学を国語科教材とすることで、韓国の平和教育へ接続していくことである。本稿では韓国の小学生が読めるように、日本の教科書に採録されている戦争児童文学を分析し、韓国の教育現場へどのような形で導入すれば良いかを検討する。

2. 日韓戦争児童文学の分析・考察

(1) 日本の戦争児童文学の分析・考察

韓国の小学校国語教科書は一種の国定であるが、日本では教科書検定制度が採用されている。日本の小学校の国語教科書は、2022年現在、学校図書、教育出版、東京書籍、光村図書から発行される4種の教科書がある。この4社の教科書を分析して韓国の教育現場へ導入する日本の戦争児童文学を取り出した。

1) 「ヒロシマの歌」

- ①採録教科書・学年：光村図書、東京書籍（令和2年版）・6学年
- ②主人公：ヒロ子（女子）、稲毛（元軍人）
- ③題材：原爆、生き残った原爆被害者
- ④テーマ：戦後の苦難の中で互いに支え合い生きていく共助と復興と平和の追求
- ⑤戦争の形態：原爆、後遺障害
- ⑥あらすじ：原爆が投下された広島では死者や傷ついた人々が溢れていた。軍人だった「わたし」は死んでいくある女性から赤ちゃんを抱きとる。そ

して通りかかった夫婦に赤ちゃんを預ける。戦争が終わって7年目、ラジオの尋ね人の番組を聞いていた「わたし」は赤ちゃんを渡した人が自分を捜していることを知る。そして養母と赤ちゃんだったヒロ子と再会する。その後の養母とヒロ子には色々苦難があったが、2人が助け合いながら生き抜いてきたことに15年後に会った「わたし」は感服する。「わたし」はヒロ子に実母のことを告げ、次の日「わたし」が乗った汽車が広島駅から離れようとする時に、ヒロ子が作った「わたし」のインシヤルや原子雲が施されたワイシャツを受け取る。

- ⑦作品の特徴：話の中で被爆した人は即死あるいは傷ついて死んでいった。生き残っても白血病などにかかって死んでいった。原爆は広島の人々のすべてを奪った。戦争の痛みは戦後にも続いていく。核兵器は人々の命からあらゆるものを奪ってしまう。その中で生き延びた人たちは互いに助け合いながら復興を図る。赤ちゃんを失った母親と母親を失った赤ちゃんが新しく家族になって、母子2人が互いに助け合いながら生き、成長していく姿は教材として相応しいと考えられる。

2)「川とノリオ」

- ①採録教科書・学年：教育出版、学校図書（令和2年版）・6学年
- ②主人公：ノリオ（男子）
- ③題材：川（自然）、戦争、原爆
- ④テーマ：大切な親を失った子供の人生
- ⑤戦争の形態：出征、原爆
- ⑥あらすじ：ノリオが1歳の時、父親は兵隊として戦地に招集される。祖父と母親はノリオを育てながら生計を立てる。川で遊んでいるノリオが怯えている際に母親は何度も守ってくれる。しかし母親も原爆で死ぬ。戦後ノリオは祖父と2人だけで暮らす。その後小学校2年生になったノリオが今でも遊んでいる川には母親の不在がある。ノリオはヤギをつれて草刈りに行く。ヤギは自分の母さんと呼ぶように鳴く。ノリオはかまで草刈りをしながら「母ちゃん帰れ」と叫ぶ。
- ⑦作品の特徴：両親を失った子供の話である。父親は戦場から遺骨になって帰ってきたが、母親は広島市のどこかで死んで遺体が帰って来なかった。このため主人公のノリオは、母の死を受け入れられない。最後の場面の「母ちゃん帰れ」がこのことを示している。戦争はだれかの大事な親を奪ったり残った人を悲惨な境遇にしたりする。戦争がなければ普通の家族として幸せに暮らすことがで

きたのに、ノリオは両親が死んで祖父と2人きりの生活になり、守られるべき子供としてではなく社会で働く小さな人間として生きることになる。戦争が子供から奪うものを平易な文章で伝えるこの作品も、韓国で教材とするに相応しい作品である。

3)「いわたくんちのおばあちゃん」

- ①採録教科書・学年：東京書籍（令和2年版）・6学年
- ②主人公：ぼく（語り手）、ちづこさん（女子・いわたくんちのおばあさん）
- ③題材：原爆が落とされた町、家族写真、原爆でも生き残った庭漆の木
- ④テーマ：原爆がもたらした一家の悲劇、忘れられない原爆の悲惨
- ⑤戦争の形態：原爆
- ⑥あらすじ：語り手のぼくは自分にサッカーを教えてくれた6年生のいわたくんちと仲が良い。いわたくんのお母さんが自分たちの写真を撮ってくれて、お返しとしていわたくんの家族の写真を撮ろうとしたらいわたくんのおばあさんだけ断る。ぼくはその理由を分かっている。前の「平和学習」でいわたくんのおばあさんの原爆の話を知ったことがあるからだ。いわたくんのおばあさんの名前はちづこで、16歳の頃に原爆に遭い家族が全員死亡した。ちづこが住んでいた町の近くで原爆が落とされ多くの人が焼死した。ちづこは焼死した自分の家族の死体をみて泣き続けるしかなかった。戦争が終わって数カ月後、ちづこの家族の写真を撮ってくれた写真館のおじさんに出会う。その写真を見ることができた人は家族の中でちづこしかいなかった。家族写真を撮った後家族が死亡したため、今でもいわたくんのおばあさんはいわたくんの家族の写真に撮られないようにしている。主人公のぼくは、原爆も平和もみて来た庭漆の木を見上げながら戦争が二度と起こらないよう祈る。いわたくんのお母さんはいわたくんとおばあさんの写真を遠くから撮る。
- ⑦作品の特徴：語り手として登場するぼくは平和学習で聞きたいわたくんのおばあさんの原爆の話を淡々と語っている。それで読者は原爆を間近で目撃しているように全体的に原爆の悲惨さを感じられる。日常生活を営んでいた庶民は戦争を求めたことがない。ある日、多くの人が死亡した原爆のため一人の少女を残して一家が亡くなる。戦争のせいで貧しい生活をしていた人々は、原爆でこの一家のように死んでしまう。この作品は原爆で亡

くなった大勢の人々の中の一家族の話を描いている。そして、原爆が落とされた日からいまで、その日を忘れられずに生きている老人の悲しさもこの作品に窺える。韓国の日本統治時代に日本に原爆が投下され、日本が降伏して、日本の植民地時代が終わったと韓国人は学んでいる。日本の原爆を描いたこの作品からは、原爆被害が数えきれない人々の死に繋がることが分かる。そして現在、朝鮮半島に核戦争が起こる恐れがある。朝鮮半島の不安な情勢を踏まえると、この作品は一人の老婆の物語を通じて核兵器の恐ろしさを教えることができるので、教材として相応しいと考える。

4) 「一つの花」

- ①採録教科書・学年：教育出版，光村図書，東京書籍，学校図書（令和2年版）・4 学年
- ②主人公：ゆみ子（女子），お父さん
- ③題材：少しの食べ物，「一つだけ」と言う言葉
- ④テーマ：窮乏と平和
- ⑤戦争の形態：戦争による窮乏，父親の出征
- ⑥あらすじ：戦時中だったので町は敵の空襲に焼かれて灰になって行った。主人公のゆみ子は「一つだけちょうだい」とよく言った。ゆみ子が「一つだけちょうだい」と言うと親は食べ物をくれた。まもなく、丈夫ではない父親が兵隊に招集されることになった。父親を駅から見送る際にゆみ子は母親のかばんの中にあるおにぎりを気づき、また「一つだけちょうだい」と言った。そのおにぎりを全部食べてしまっても、また「一つだけ」と言うゆみ子のため父親は最後にコスモスの花を見つけてゆみ子に一輪だけあげる。それから10年後、父親はいなくてゆみ子は母親と2人で住んでいる。コスモスの花でいっぱい包まれている家で、母親はミシン縫いの仕事をしており、ゆみ子は食事の支度をしている。
- ⑦作品の特徴：ゆみ子の「一つだけちょうだい」はゆみ子を代表する言葉である。この言葉は読んで字のごとく一つだけ求める意味もあるが、子供が両親とコミュニケーションする言葉でもある。父親が出征時に父親がゆみ子にくれたコスモスの花は、10年後にゆみ子の家を包んでいる。しかし父親はいない。コスモスの花が父親を象徴しているが父親ではないので悲しみが一層深くなる。また一輪のコスモスの花は、1人しかいない父親からの愛情の象徴でもあるので、父親本人は不在でも、父親の愛情が2人を見守っていることを示している。韓国の朝鮮戦争でも父親が兵隊に招集されて戦死し、結局はひとり親家庭になる場合が多

数あった。どの国の戦争であれ、戦争は家族の幸福を奪ってしまう。この作品を通して朝鮮戦争における韓国の家族の悲しみや、命のようにたった一つしかない価値が指導可能であるので、教材として相応しいと考える。

5) 「ちいちゃんのかげおくり」

- ①採録教科書・学年：光村図書（令和2年版）3 学年
- ②主人公：ちいちゃん（女子）
- ③題材：かげおくり，戦争
- ④テーマ：戦争で家族を失った幼児の悲しみ
- ⑤戦争の形態：出征，空襲
- ⑥あらすじ：主人公のちいちゃんは家族と楽しくかげおくりの遊びをする。しかし、体の弱い父親が戦争に行かなければならないことになる。戦争が激しくなってちいちゃんの町ではもうかげおくりなどできなくなる。ある夜、空襲警報が鳴ってちいちゃんの家族は逃げる。逃げる途中でちいちゃんは母親と兄とはぐれる。その後家の焼け跡に戻ったちいちゃんは、雑糞の中にいれてあるほしいを食べたり防空壕に入って寝たりしながら母と兄を待つが、家族とかげおくりをする幻影を見ながら衰弱死する。それから何十年が過ぎて、ちいちゃんが1人でかげおくりをした所は小さな公園になっている。そこでは子供たちが遊んでいる。
- ⑦作品の特徴：この作品では戦争が家族の存在を奪う一連の過程が示されている。父親は戦争に駆り出され、母親と兄は空襲から逃れられずに死ぬ。独りぼっちになった主人公は大人の支援もなく死んでいく。「かげおくり」という遊びを素材として、戦争がやすやすと家族の幸せを奪い去る悲しみがこの作品で描かれている。最後の場面では主人公が死んだ場所が何十年過ぎて、子どもたちの歓声が聞こえる公園になっていることが戦争の悲惨さを対照的に描いている。戦争が奪った一家や子供の幸福を、幼い女の子を主人公として描写していることから、年齢の近い児童に教材として読ませるに相応しいと考えられる。

(2) 韓国の戦争児童文学の分析・考察

現在、韓国の小学校国語教科書には戦争児童文学が採録されていないため、学校で朝鮮戦争や平和を学習する際によく使われる戦争児童文学を、以下に紹介する。

1) 「ジャンジン湖から来た子」

- ①配当学年：6 学年相当

- ②主人公：ガンウ（男子）
- ③題材：人民軍，韓国軍・米軍，避難，撤退，再会
- ④テーマ：避難による別れ，イデオロギー対立
- ⑤戦争の形態：陸戦（空戦を含む）
- ⑥あらすじ：主人公のガンウはジャンジン湖が遊び場だった。ジャンジン湖は北朝鮮のハガルウリという地域にある。朝鮮戦争が起こってガンウの兄は兵隊にとられる。戦勢が逆転され地域の占領軍が北朝鮮の人民軍から米軍に変わる。しかし，また逆転され主人公の家族は避難する。一部の家族が死亡し（イデオロギー対立による処刑）生活が困窮になったガンウの家族はフナム（地域名）から米軍の船に乗って避難しようとする。そのうちに主人公のガンウは家族と別れて一人ぼっちになる。そしてまもなく南北分断になって一家は離散する。捕虜になった兄とは韓国で再会する。「北朝鮮で住んでいたガンウには南のゴジェ島の潮風が柔らかく感じられた。みんなが来たがっていた南の土，南の風だった」。この場面では北朝鮮を苦難の地として描写し，南の土は希望の地として描写している。
- ⑦作品の特徴：イデオロギー対立により起こった戦争を詳細に描写している。同じ言語，歴史的な経験を共有している韓民族がイデオロギー対立によって分断されたことは悲しいことに間違いない。登場人物が避難や死を経験するため，場面描写を通じて戦争の惨状を読み取れる。そのため教材として相応しいと考える。

2)「ママへ」

- ①配当学年：5 学年相当
- ②主人公：児童，民間人
- ③題材：戦争と避難生活，休戦，離散家族
- ④テーマ：離別の悲しみ
- ⑤戦争の形態：陸戦（空襲を含む）
- ⑥あらすじ：朝鮮戦争が起こって「ぼく」の家族は避難計画を立てる。しかし，おじいさんとおばあさんは家を守りたいと残る。両親が家に残ることが気になった父親は自分も残ると決める。子供らをつれて避難した母親は誤って夫の服の包みも持ってきたことに気づき，家に戻る。再び避難する際は，父親と「ぼく」だけ南の方に避難する。その間に休戦して南北の真ん中に境界線ができて人の往来ができなくなる。その後父親は，韓国の医療福祉に一生を捧げる。父親は北に残った家族を慕う。
- ⑦作品の特徴：「ぼく」の父親チャン・キリョは，名古屋大学医学部出身の博士で，戦後韓国の医療

福祉に尽力した人物である。貧しい患者の治療に献身した医者として知られているが，その献身の裏側には戦争の痛みがあった。この作品では戦後一家離散の悲しみを抱えたまま，医療福祉に人生を捧げた英雄として描写されている。チャン・キリョは韓国人として尊敬すべき人物である。この作品は事実に基づいており，伝記教材として教材化することが可能である。

3)「ゴムイとオプンドリおじさん」

- ①配当学年：6 学年相当
- ②主人公：児童，軍人
- ③題材：戦争，幽霊，兵隊，韓国民話「お日様とお月様になったきょうだい」
- ④テーマ：戦争の意味
- ⑤戦争の形態：空襲，銃撃戦
- ⑥あらすじ：戦争が起こってゴムイは家族と北朝鮮から南の方に避難する。しかし空襲で全員死亡する。ゴムイは死んで地元に帰れなくなった。死を免れるよう北朝鮮から南の方に走り出したが，ゴムイを追いかけてくる戦争に喰われ結局家族とともに死亡したのである。オプンドリおじさんは韓国軍の弾に当たって戦死する。北朝鮮の人民のため，人民軍として参戦したのに，死んだのは可哀想な人民ばかりだった。この2人は幽霊になって毎夜現れては，戦争の悲劇を思い出す。毎夜奪われたすべてのものから悲しを感じる。弱者である庶民が戦争に巻き込まれたことを示すため，朝鮮戦争を韓国民話「お日様とお月様になったきょうだい」に喩えている。戦争はどちらかが死ななければ終わりがけないため，敵も味方も大きな被害を受けるしかない。もともと一つの国だった韓国と北朝鮮がそれぞれお日様とお月様に喩えられ，ついには虎（戦争）に両方とも喰われてしまう。
- ⑦作品の特徴：作者は韓国人であるが，戦争を冷静に観察している。国籍を超えて，無意味な戦争を民話に喩えて語る。登場人物の2人は北朝鮮の出身である。いまだに韓国社会では反共産主義が残っている。そのため登場人物の全員が北朝鮮の出身の作品は韓国ではほばない。登場人物の名前「ゴムイ」や「オプンドリ」は田舎臭い名称である。これは双方の国が自分の損得を考えず，愚直で純朴な態度をもつことが平和につながることを示す。朝鮮戦争の悲劇だけでなく，その特徴であるイデオロギー対立を韓国民話に喩えて描写することは児童に理解させやすい。文学教育の観点からは児童が作品の世界と現実の世界の共通点や相違点の理解を通じて，現在の分断に対する児童自身

の平和観の形成を進めることに役立つ。そしてこの作品を読むことから社会を俯瞰した観点でみることが可能となる。

4) 「その年の六月は」

- ①配当学年：4 学年相当
- ②主人公：児童
- ③題材：人民軍，韓国軍および米軍，避難，再会，空襲
- ④テーマ：避難による離別，イデオロギー対立
- ⑤戦争の形態：陸戦（空襲を含む）
- ⑥あらすじ：朝鮮戦争が起こって，主人公のジョンヒの父親と兄は兵隊にとられる。空襲でおばあさんと弟は行方不明になる。ジョンヒはこの空襲で母さんとも別れる。ジョンヒは母方の実家に避難しに行くが途中で人民軍のソクに出会う。ソクは韓国の敵の人民軍であるが，彼に色々手伝ってもらう。ついに自分と似たような立場の子供らと孤児院で過ごす。最後には別れた母親と再会し，人々と力を合わせて孤児院を創設する。最後の場面でジョンヒは独り言で「瓜の花の汁が落ちるまえにこの恐ろしい戦争がおわったら」と言う。味方の米軍の空襲でソウルにいた人たちは死亡した。空襲は民間人と敵軍を区別せず爆撃したため，多くの民間人が死亡したのである。直接に攻撃を受けて死亡した以外にも，イデオロギー対立による虐殺も行われた。北朝鮮の人民軍が占領した際には人民裁判が行われて民間人を射殺し，韓国軍が占領した際には韓国軍およびUN軍による射殺が行われた。弱者であった庶民はその中で死んでいき，子供らは孤児になって行った。
- ⑦作品の特徴：イデオロギー対立による悲劇が描かれている。民間人の虐殺は人民軍からも韓国軍からも行われた。弱者である庶民には味方も敵軍も自分たちの生存を脅かす存在に過ぎない。すなわち軍隊が，人々を守るよりも脅威になったことをこの作品は示している。この作品では庶民が受けた被害が総合的に描かれており，また庶民が同じ庶民のために復旧に尽力したことも窺える。戦争の全体的な悲劇を描いたこの作品で，それぞれの登場人物に共感しながら戦争の全体像が読み取れる。文学教育の活動を通して，戦争の惨状と庶民が助け合う姿を児童に理解させられるので，教材に相応しいと考える。

(3) 日韓戦争児童文学の主要素の比較考察

1) 登場人物

日本の小学校国語教科書以外の児童文学作品も含

めてみると，日本の戦争児童文学では軍人から庶民，そして動物までも登場する。そしてそれぞれ自分の立場で，自分の大事にしているものを守るため力をつくす。大事にしているものは，家族やペットなどの動物の命である。大事にしているもののの中には，日本の帝国主義イデオロギーもあるが，作品の後半部では国より戦争・原爆で奪われた命や日常生活を懐かしむ。登場人物は国民として「国」と人間としての「自分」との間で葛藤する。結局は戦争を批判する「自分」の方に近づいていく。「自分」の存在に近づいて行けば行くほど，戦争を起こした「国」という悪のシステムと「自分」が対比され，「自分」が大事にしている命やものをすべて奪った戦争の残酷性が浮かび上がる。

韓国の戦争児童文学では登場人物の種類が限定的である。日本の戦争児童文学のように参戦した軍人や人間以外の存在が少ない。登場人物は自分達が大事にしている人を守るため力を尽くす。登場人物は北朝鮮による攻撃を避けようと家族と一緒に地元から避難するか，地元に残り占領した軍人の顔色をうかがいながら生きていくかを選択する。「国」に対しての批判はほぼない。登場人物はだいたい自分の状況を仕方なく受け止めている。これは日本の戦争と朝鮮戦争が違っているためである。韓国の立場は侵略された被害者である。韓国人が北朝鮮の人民軍を批判することが作品でよく出ているが，これは北朝鮮が現在でも韓国にとって脅威であるからだ。同じく北朝鮮の童話では戦争中の韓国を悪として描写している。

2) 作品世界

日本の戦争児童文学の作品世界は，「失われた日常生活の幸福」が描かれている。家族の男性が兵隊に駆り出されることから家族崩壊がはじまり，空襲や原爆などの物理的な攻撃から家族が破壊されてしまう。このことは教科書に採録されている「ヒロシマの歌」「川とノリオ」，「ちいちゃんのかげおくり」，「いわたくんちのおばあちゃん」から窺える。「ヒロシマの歌」「川とノリオ」では，主人公たちが子供として享受すべきことができず早く社会の一員にならなければなかった。つまり戦争のせいで人生が歪められてしまった。このように日本の戦争児童文学の作品世界は，人間性に基づき，人間でいれば当然に享受できるものが戦争によって奪われていく様相を対象としている。

韓国の戦争児童文学では戦争自体の辛さや占領された生活の苦しさなどが主に描かれている。攻撃を避けるため避難したり占領軍の顔色を窺ったりする

様子が描かれている。そもそも朝鮮戦争が起こった背景は東西のイデオロギー対立であるため、日本の戦争児童文学の成り立ちとは異なる。大部分の作品では韓国が戦争に参加することは正しいことだとみなし、庶民が受け入れた戦争の辛苦が描かれている。そのため攻撃による避難や家族との離別が主な内容になっている。

3) 社会システム

教科書に採録された作品以外も含めて、日本の戦争児童文学作品の登場人物は日本の帝国主義に批判的な立場である。「国」のための戦争協力によって自分たちが大事にしている存在が亡くなっていく。自分が大事にしているものやことがなくなるにつれて登場人物は日本の帝国主義に恨みをもつようになる。戦争中の「国」は悪のシステムである。戦争が起これば一番に被害を受けるのは庶民だからだ。高い地位にいる者は戦争中でも生き延びる。そして庶民に戦時教育を注入して庶民の日常生活をやめさせる。弱者である庶民が「国」が悪のシステムであることに気づく時は、自分たちが大事にしている存在を戦争のために失った時である。

人間は能動的な存在であるが、巨大なシステムが大きく厳しくなるほど人間は受動的な存在になる。戦争中では「国」という巨大なシステムに統制され、人間はそのシステムの道具に転落する。自分の意志とは関係なく兵隊に駆り出されて戦死する話は日本の戦争児童文学によく出ている。このことを表す多くの日本の戦争児童文学では日本の帝国主義を間接的に批判している。大事な人の喪失、無駄に失われた生命、戦争中の日常生活の困難などから戦争を起こした日本の帝国主義を批判し、平和を求めている。

韓国の戦争児童文学作品については、韓国が戦争を意図的に起こしたことがないため、社会システムに対しての批判は少ない。韓国の戦争児童文学は戦争の流れを踏まえ、韓国を力のない侵略された被害者として想定している。外交の観点からも現在でも北朝鮮は韓国側の脅威国であるため、国に対する批判は少ない。

4) 期待される指導内容

日本の戦争児童文学では、戦争への反省から平和を追求する作者の思いが窺える。日常生活や家族の命が戦争によって奪われたことで登場人物が悲しみ苦しんでいることから、平和の重要性が読み取れる。そして、戦争を起こすのは弱者の庶民ではなく国家という巨大なシステムなので、巨大なシステムが意味のない戦争を起こそうとすれば人々は反戦の声を

上げる必要があるという主張にもつながる。一例として、教科書に採録されている「いわたくんちのおばあちゃん」の最後の場面で主人公が子供ならではの言葉で反戦を誓っている。このことから読者である同年輩の子供の反戦意識が育まれ、未来をリードする読者が大人になると平和が続くよう反戦に力を尽くすことが期待される。

韓国の戦争児童文学も平和を追求しているが、登場人物や語り手が直接に平和を追求する発言をすることは少ない。朝鮮戦争は東西のイデオロギー対立から生じたものなので、イデオロギー対立に関して争うより仲直りをしてから平和を追求しようとしている。一例として「ゴムイとオプンドリおじさん」が挙げられ、朝鮮戦争を韓国民話「お日様とお月様になったきょうだい」に喩え、国家間が仲良く過ごしていれば悲惨な戦争に遭わなかったと描いている。

日本の戦争児童文学は戦争・原爆自体が悲惨なことから平和への教訓としているが、韓国の戦争児童文学は東西のイデオロギー対立から生じた朝鮮戦争を背景としており、国家間の仲直りによる平和の追求を道徳科で主に指導している。これを道徳科だけではなく、国語科の文学教育に導入することで物語を読んで国語力を育成するとともに、反戦意識の内面化を図ることができる。次章では、そのための提案を述べたい。

3. 韓国の学習指導要領に基づいた導入の実例

(1) 戦争児童文学の指導に関わる韓国の文学学習指導要領分析

韓国の小学校学習指導要領（2015年国語科教育課程）によると国語科の内容の構成は、以下の通りである。

表1 韓国国語科の内容の構成

内容体系	[聞く・話す] [読む] [書く] [文法] [文学]
力 量	批判的・創意的思考力量, 資料・情報活用力量, コミュニケーション力量, 共同体・対人関係力量, 文化享有力量, 自己省察・啓発力量

取り上げた日本や韓国の戦争児童文学の指導で主に重点となる領域は「文学」である。韓国の学習指導要領では内容の体系が[聞く・話す]・[読む]・[書く]・[文法]・[文学]と分類されているが、学習指導要領によるとこれらを区分せずに統合的に指導するように勧めている。ひいては他教科も連携して実質的な国語能力を養うよう述べている。これは日本と似ている。

「文学」の領域の核心概念は、「文学の本質」・「文学の系統と歴史」・「文学と媒体」・「文学の受容と生産」・「文学に対する態度」である（図1参照）。戦争児童文学に関連する核心概念は、「文学の受容と生産」・「文学に対する態度」である。「文学の受容と生産」については、日本の学習指導要領のように登場人物の人物像や表現に着目している。第1学年及び第2学年は「作品の中の人物像を想像すること」、第3学年及び第4学年は「人物・事件・背景を捉えること」・「作品に対しての考えや感想を表現」、第5学年及び第6学年は「比喩的な表現の特徴や効果を捉えること」が指導内容として求められており³⁾、作品の中の様々な表現に着目し、それを自分でも工夫して表現してみる活動や児童自身の考えを共有する活動などが日本と似ている。

一つ違うことは、日本の小学校学習指導要領の〔思考力、判断力、表現力等〕の「C 読むこと」で第3学年及び第4学年は「(1) エ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること」、第5学年及び第6学年は「(1) エ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。」と述べている点である。想像とは読み手が想像力を用いて登場人物の行動・心情・人物像・物語などの全体像を読み取ることであるが、韓国ではこれを含め、「文学」の領域の核心概念の「文学の受容と生産」で「書かれていない後に続く内容を想

像すること」が、日本よりも早い第3学年及び第4学年で明記されている。ただし日本も実際の教育現場では、想像力を用いて後に続く内容を予想する活動を早い学年で行っていたようだ。

「文学に対する態度」は、日本の「考えの形成」にあたる。特に、日本の小学校学習指導要領の〔思考力、判断力、表現力等〕の「C 読むこと」で、第3学年及び第4学年は「(1) オ 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと。」、第5学年及び第6学年は「(1) オ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。」と述べているが、韓国では「文学」の領域の核心概念の「文学に対する態度」で「作品で見出した価値を内面化する」と述べている。内面化の過程は感想や考えをもってそれをまとめながら児童自身の考えや価値を形成することなので、日本と意味的に一緒である。以上、韓国の学習指導要領における「文学の受容と生産」と「文学に対する態度」に関する考察から、韓国の初等国語科教育に、日本の戦争児童文学を導入することは可能であると考える。

なお、前頁表1にある「力量」は日本の学習指導要領で述べている国語科の教育が目指す「能力」とほぼ同じ意味である。

(2) 導入の意義

日本の戦争児童文学を韓国へ導入することは、ただ児童に作品を読ませることに限らない。戦争児童

【文学】

核心概念	一般化された知識	学年別内容要素					機能
		初等学校			中学校 1～3学年	高等学校 1学年	
		1～2学年	3～4学年	5～6学年			
・文学の本質	文学とは人間の生を言語で 形象化した作品を通して楽 しみや深い理解を得て他者 とコミュニケーションする 行為である。			価値のある内容の言語的な表現	審美的な体験のコミュニケー ション	有機的な構造	
・文学の系統と歴史 ・文学と媒体	文学は叙情・叙事・劇・教 述の基本の系統を中心とし て言語・文字・媒体の変化 とともに時代の流れによっ て変わってきた。	絵本 ・童謡 童詩 ・童話	・童謡 童詩 ・童話 ・童劇	歌 詩 物語 小説 劇	歌 詩 物語 小説 劇 教述	・叙情 叙事 ・劇 教述 ・文学の系統と歴史	没入 理解・解釈 鑑賞・批評
・文学の受容と生産 ・作品の内容・形式・表現 ・作品の文脈 ・作家と読者	文学は多様な文脈に基づい て作家と読者が創意的に作 品を生産して受容する活動 である。	作品創読 鑑賞 作品の登場人物の想像 言葉遊びと言葉の面白さ ・日常の出来事sの表現	・感性的な表現 ・人物・事件・背景 続く内容の想像 ・作品に対しての思 いや感想	作品の世界と現実の世界の比較 比喩的な表現の特性と効果 ・日常の経験の劇化 作品の理解とコミュニケーション	・比喩・象徴の効果 ・葛藤の進行と解決過程 読み手と語り手の観点 作品の社会・文化的な背景 作品の現代的な意味 作品解釈の多様性 ・再構成された作品受容の様相 個性的な発想と表現	・系統の特性による形象化方法 ・多様な社会・文学的な価値 時代別の代表作	・省察・享有 模倣・創作 共有・コミュニケ ーション 点検・調整
・文学に対する態度 ・自我省察 ・他者の理解とコミュニケー ーション ・文学の生活化	文学の価値を認識し人間と 世界を省察しながら文学を 生活化すると文学能力が効 果的に伸長する。	・文学に対する興味	・作品を好んで鑑賞 すること	・作品の価値を内面化	・文学を通じた省察	・文学の主體的な受容と生活化	

図1 学習指導要領の内容体系²⁾

表2 韓国の初等教育導入における作品配置案

学年	作品名	指導時のポイント
中学年	川とノリオ	戦争で両親を失った男の子の成長への共感
	一つの花	父が戦死しても母と前向きに生きていく姿
	ちいちゃんのかげおくり	戦争が、幼い子どもとその家族全員の命を奪ってしまう悲劇
	その年の六月は	庶民の戦中の辛苦と日本の「ヒロシマの歌」のような戦後の共助・復興
	ママへ	戦中の悲しみや戦後の実相
高学年	ヒロシマの歌	被爆後、登場人物たちの共助・成長する姿とヒロシマの復興
	いわたくんちのおばあちゃん	原爆による家族の死と、戦争がまた起こらないように祈ること
	ジャンジン湖から来た子	登場人物の行動や言動、作品の背景から窺える戦争の実相
	ゴムイとオブンドリおじさん	戦争で幽霊になった主人公2人が問う戦争の意味

文学の導入には必ず教育的な目的がなければならない。そこで各国の学習指導要領を分析して戦争児童文学が教育現場でどのような役割を果たしているのかを知っておくべきである。上記のように日本は「文学」の領域を基にして文学を教育現場で指導している。戦争児童文学の主な内容は悲惨な状況で生き残る人間の生である。生存と生存をめぐる登場人物の考えや感情を教育現場で読み取るためには、加えて教育的な目的を極大化するためには、上記した学習指導要領を考慮することが重要である。

「文学」の領域に基づいて韓国の国語教育におけるメリットを取り上げるとすれば、戦争児童文学では小説同様人物・事件・背景が描かれるので小説を学ぶように作品を分析する力を育むことができる。戦争自体の悲惨な情景から感覚的な表現や比喩的表現の特徴・効果も学べる。作品世界と事実は異なることが多いので、その違いを比較・検討することから悲惨な事実を理解することができる。「文学」の領域では語彙を豊かにすることが明記されていないが、実際の指導では全領域の統合を図っているので戦争用語や昔の言葉などを学ぶことができる。そして、平和教育は教訓を主として道徳科で行われてきたが、国語教育で登場人物の性格・心情・作品の全体像などを深く読み取っていきながら戦争の惨状を捉えることで、反戦意識を育み平和教育へ繋ぐことができる。

(3) 学年による作品配置案

韓国の教育現場へ紹介する作品の配置は上記の表2のようにした。中学年の児童は作品を読んで全体的なテーマや自身が読み取った内容に基づいて様々な表現をすることができる。特に、自分自身とほぼ同じ歳の登場人物が作品に出てくるとその人物に感情移入する傾向がある。これは登場人物への共感となり、感情や思いを表現しながら人の命などを奪う恐ろしい戦争を理解する。分量・テキストの表現の

難易度・主人公の年齢を考慮すると、日本の作品「川とノリオ」・「一つの花」・「ちいちゃんのかげおくり」と韓国の作品「その年の六月は」・「ママへ」が韓国の小学校中学年に紹介するのに適合する。高学年では日本の作品「ヒロシマの歌」・「いわたくんちのおばあちゃん」と韓国の作品「ジャンジン湖から来た子」・「ゴムイとオブンドリおじさん」を配置した。高学年の児童は作品世界と現実世界との比較および分析が可能である。実際のような悲惨さを戦争児童文学から理解し、現実世界を再認識して悲惨な事があったことを読み取る。さらに高学年は作品中に見いだした価値を内面化することができ、戦争用語や歴史的な事項も既習済みであるため、自分自身が戦争児童文学から読み取った平和の価値を内面化することや作品の理解が容易である。

(4) 学習活動の開発

上述したように韓国では、国語科だけでなく他教科と連動させた指導および他教科と統合した授業を行うことで国語力を実質化させることが求められている。以下では、日本と韓国の児童文学作品を導入した場合、他教科とどのように組み合わせた授業の構築が可能かを述べてみたい。

①美術科との連携活動

日本や韓国の戦争児童文学を読んで印象に残ったイメージを絵に描く活動を実施する。文学的な想像を具体的に描写することで、戦争の惨状を捉える。広島では高校生が被爆者の証言を聞き取り、それを絵画にして発表する活動をしている。個々の被爆者の体験は写真や映像に残らないものばかりであるが、それを若い世代が絵画にして被爆体験を「全身で」共有することで、被爆体験の間接的な受容だけでなく、後世への記憶の継承を図っている。

韓国は北朝鮮と停戦状態であるため戦争の惨状が繰り返される可能性がある。そのため、広島の高校

生が戦争を美術で再現したように児童に自分が読んで捉えた戦争のイメージなどを絵画として表現させる。この「描く」ことを通じて戦争を「体験」させることができる。

②道徳科との連携活動

韓国の道徳科では人間尊重の思想、ひいては生命尊重の思想まで児童が学ぶ。こういったものは平和教育までつながる。韓国の児童はストーリーテリングが好きなので、戦争児童文学は人間や生命の尊重を教える教材として適合する。日本は戦争や原爆から平和を追求し当時の悲慘を語り継ぐため、戦争児童文学を生み出した。いま朝鮮半島では北朝鮮が核兵器を保有し、韓国の味方の米軍も核兵器を保有して、両国が対峙している状況である。韓国の道徳科ではこの状況の理解の下、昔に起こった朝鮮戦争を素材として平和教育を行っている。しかし、教科書の分量のため事実を並べているに過ぎないのが現状である。それでは戦争の惨状を深く理解することができない。その点で実際に核兵器の被害があった隣国日本の戦争児童文学を用いて、核兵器のある朝鮮半島の平和を追求する教育は効果的である。児童が日本と韓国の戦争児童文学を読みながら、人命や人権というものが屑のように扱われる戦争と核兵器の使用を批判し、反戦意識が育まれるように指導する。また文学は虚構と事実を含んでいるので、実際に戦時に居合わせた人々のインタビューや証言をメディアを通して確認し探究する活動ができる。こうして、道徳教科書に述べてある平和の重要性が確かめられる。

③他教科と統合した授業

韓国の教育現場では他教科と統合した授業が多くある。教育効果を高めるため一つのテーマを設定し、そのテーマが各教科の授業目標に合うように設計する。この統合の利点は効率的に授業を構成し一つの教科で学んだものが他教科にもつながることを児童が認識することである。これは児童の主体的な学習を進めることになる。例えば6学年の授業で、国語科・社会科・道徳科を統合して国語科目標の「南北統一を巡るそれぞれの観点を理解すること」と、社会科・道徳科目標の「南北統一を巡る様々な意見の根拠を理解すること」を授業目標と設定し、「南北統一」をテーマで指導することが可能である。指導教員が授業を再構成することが韓国の教育課程で勧められているので、授業目標・指導内容・統合などは児童の成就基準の範囲内で指導教員が再構成することができる。なお連携活動が統合授業と違う点は、

連携は中心となっている教科があり、他教科で学んだことを素材として使うことを主としていることである。評価についても中心となる科目で行う。戦争児童文学を用いて6学年でできる統合授業は国語科と社会科との統合がしやすい。6学年の成就基準に基づき、国語科目標として「作品の世界と現実世界を比べながら作品の鑑賞をすること」と、社会科目標として「朝鮮戦争の原因と過程を理解し、その被害と影響を探究すること」を授業の目標とする。そしてテーマは「色々な戦争童話を読みながら朝鮮戦争の歴史的な事実を理解する」にする。他の統合の例では、上記した美術科や道徳科の連携活動を、初めから国語科と統合し再構成することが考えられる。

4. おわりに

かつて韓国は日本の植民地であった。韓国人は日本帝国主義の侵略の被害者として、日本人も戦争の被害者であることを認められない傾向がある。日本人が戦争を起こしたのに日本人も被害者というのは話のつじつまが合わないように受け止められる。韓国では政治的に反日を利用して自分の政治生命を維持する政治家もいるし、社会全般には歴史問題がもたらす反日運動が盛んに行われている。例えば、韓国の教育全般では、日本帝国主義の侵略における韓国側の被害や日本から謝罪をうけるべき当為性を教えるより、日本に対しての単なる「怒り」を教育することがよくある。^{4) 5)}「怒り」を教育するとは、日本帝国主義から侵略されたことを学んで今の日本に対して敵愾心をもつということである。つまり、児童は今の日本を敵国として認識することになる。韓国人として日本帝国主義から侵略されたことは悔しいことで間違いないが、現代は日本と韓国は協力して共存を目指す状況である。この状況を踏まえて未来を導くべき児童が、日本に対して単なる「怒り」をもっていれば日韓関係に障害が生じるかもしれない。日本の戦争被害を、日本児童文学作品を通して韓国の児童が理解することは、そのような「怒り」の教育を改善し、平和主義の価値観を育成することに役立つと考える。

現在、東ヨーロッパではロシアによるウクライナ侵攻が行われている。いまの時代に大規模な戦争が起こることは珍しいことである。いままでもUNや各国の外交的な努力で戦争を避けてきたが、政治首脳部の誤った判断で数え切れない数の人々が死んでしまった。両国の軍人やウクライナの民間人が多く死んでしまった。もしその国の教育現場で反戦意識を育み高める教育が行われていれば、政治首脳部は戦争を起こすことを躊躇したかもしれない。

韓国は北朝鮮から戦争の脅威を受けている。その上、北朝鮮は核兵器をつねに開発している。その脅威で朝鮮半島では戦争の危険性が高まっている。いままではその脅威に应じていなかったが、韓国国民全体の反戦意識が低くなっていった場合その脅威に应じて戦争を起こしてしまう可能性がある。勿論北朝鮮からの脅威により国民を守る防衛力を高めることは適切であるが、その脅威に乗じて高めた防衛力で戦争を起こすことは不適切である。

本稿は上記した戦争を防ぐため教育現場からの役割を強調している。平和教育の一環として児童に戦争児童文学を読ませて反戦意識が高まるようにする。朝鮮戦争と異なる日本の戦争から生まれた日本の戦争児童文学も児童に読ませて、国を問わず、弱者である庶民が戦争の被害を一番受けることを認識するように指導する。

勿論この指導は教育現場で行われるため、韓国の学習指導要領に従う必要がある。指導要領に従うことは平和教育を含め、総合的な国語科としての文学教育になることを意味している。さらにこのことは児童に教育する内容として当為性をもつことになる。

国語教育が国語科で行われて、児童・生徒の国語能力を育むことは当然である。そして文学教育の利点を用いて反戦意識を育み、国語教育を経て平和教育に繋がるのが可能であることが、日本の初等国語科教育で確認できた。韓国の教育現場で韓国の戦争児童文学と日本の戦争児童文学を用いることで、韓国国語科教育および平和教育をより豊かなものへと構築していきたい。

注記

- 1) 권율정 「한국전쟁 교과서 수록 너무 소홀」 (朝鮮戦争の教科書の採録が疎かだ。) (『東亜日報』私説 1997年9月19日)
- 2) 「韓国小学校学習指導要領」内容体系
- 3) 「韓国小学校学習指導要領」学年別内容要素
- 4) 「외국인들, “한국인 반일 감정 지나치다”」 (外国人たち“韓国人の反日感情がありすぎる。”) (『Media Daum』2006年09月12日)
- 5) 「“무조건 나빠” 무차별 반일감정 학교 확산」 (“絶対に悪い”無差別な反日感情が学校で拡散) (『KyongIn 日報』2019年08月01日)

参考文献

<日本語>

- ・ 木村 功 岡山大学教育学部「中等国語科内容論(児童文学)」講義資料:「ヒロシマの歌」「川とノリオ」 2022年
- ・ 文部科学省「小学校学習指導要領」(2017年)

<韓国語>

- ・ NCIC (国家教育課程情報センター): <http://ncic.go.kr/>

付記 日本の小学校の国語教科書は、2020(令和2)年度発行の教育出版、学校図書、東京書籍、光村図書の1年～6年のものを、韓国の小学校国語教科書は、2021年度発行の大韓民国教育部「韓国小学校国語教科書」1年～6年を用いた。